

〔研究ノート〕

## 新疆クチャ地方のイスラム化と仏教文化破壊 —— 中国新疆イスラム教小史④ ——

丸山 鋼二

〔Research Notes〕

### Islamization of Kucha, Xinjiang and the Destruction of the Buddhist Cultural Heritage : A Short History of Islam in Xinjiang ④

Koji MARUYAMA

#### Abstract

Though Islam force conquered the southwest of Xinjiang by the early fourteenth century, it could not advance east Kucha, ahead of Aqsu for about two hundred years. Tuglk Timur Khan, the first king of the Eastern Chaghatai-Khan Dynasty protected Islam and supported missions to Kucha. As a result of converting nomads to Islam, it is said that one hundred and sixty thousand Moguls were converted to Islam. Their conversion was superficial. Nomads who were used to living on grasslands despised Muslim living in the town and countryside. They still retained the old norm "yasaq" of Mongol horde. From the beginning it was difficult to build mosque and the law court of Islam on grasslands. Therefore Eshdin Hoja planned missions to Kucha, the rich oasis. He organaized the Islam Mission of Kucha. The Mission made massive and passionate propagation activities against the Buddhist. The Islamization of Kucha was accomplished as a consequence. Thus Buddhist cultural heritage of Kucha was destroyed.

#### はじめに

12世紀初めまでに、イスラム教勢力は新疆の南西部(カシュガル・ヤルカンド・ホータン・アクスの各地域)を征服、当地でそれまで優勢であった仏教勢力の根絶には成功するが、それ以後他地域に対するイスラム化の進展は200年ほど停滞する。その間、アクス(阿克蘇)とクチャ(庫車)との間のラインがイスラム教勢力と仏教勢力の境界線をなしていた。イスラム教勢力にとって、次の目標はクチャに対する征服と布教であった。

そのチャンスをもたらしたのが、東チャガタイ汗国初代のトゥグルク・ティムール・ハーン(禿黑魯帖木爾汗、在位1347-63年)であった。東チャガタイ汗国はモンゴル遊牧民の伝統を引き継ぐものという自負から、自らを「モグール・ウルス」(蒙兀児・兀魯思)と称した。また、「モグーリスターン・ハーン国」(蒙兀児斯坦汗国)とも呼ばれた。トゥグルクは即位の翌年(1348年、明至正8年)、一時オアシス都市のアクスに首府を置いたとされているが、アルマリク(阿力麻里)、ビシュバリク(別失八里、現在のジムサル)、イリバリク(亦力巴里、現在のイーニン)と天山北部の遊牧地帯で遷都を重ねた。その領土は東はハミ、西はフェルガーナ、北はエルチナ河、南はカラコラム山脈に

及び、いわゆる東トルキスタン地域である。それは今日の新疆の境域と基本的に同じである。

本稿では、まず新疆南部においてイスラム勢力と仏教勢力の境界線となっていたアクスとクチャについて述べる。続いて、モンゴル遊牧民(モグール人)の「16万人集団改宗」物語を取りあげて、遊牧民にとってのイスラム教の意味について考察する。最後に、現在クチャとして知られる古代城郭国家「亀茲」が仏教文化を発展させた歴史を概観した後、クチャにおけるイスラムの伝道及びそれに伴う亀茲仏教文化の破壊について検討を行なう。

## 1 アクス市とクチャ県

### ①アクス地区

新疆において西のイスラム教勢力と東の仏教勢力の境界線をなしていたアクスとクチャは、今日、新疆ウイグル自治区の行政区画では同じ「アクス地区」に属している。アクス地区には、アクス市以外に、クチャ県、沙雅(シャヤル)県、新和県、拜城県、温宿県、阿ワティ県(阿瓦提県)、柯坪(クイピン)県の9つの市・県が属している。そして、アクス市(1983年に県から市に昇格)がアクス地区行政公署の所在地であり、今日では行政上はアクス市がクチャ県を管轄するという形態となっている。地区全体の人口は1949年当時63.2万人で、ウイグル人口比率は98.13%であり、ほとんどウイグル人だけの地域であった。1998年に人口は197.7万人と増加しているが、漢族が約2割を占めるに至っている。

アクス地区は温暖乾燥型の大陸性の気候であるが、天山山脈の雪解け水が流れて、大小16本の河流が縦横に走り、水があって植生も繁茂し、農牧業が盛んである。それ故、「塞外<sup>さいがい</sup>[万里の長城の外]の江南」とか「魚米之郷」と称されることもある。耕地面積は35.33万ヘクタール、森林面積31.43万ヘクタールで、開墾可能な荒地は266.67万ヘクタールもある。アクス地区全体の食料生産量は100万トンで、新疆で3番目の生産量である。綿花の栽培が盛んで、総生産量も単位面積あたり生産量とも新疆第一位で、全国最大の綿花生産地域である。牛羊の生産量も新疆第三位で、とくにカラル(カラ爾)羊の生産基地は中国の中でもここだけで、百万絨山羊の基地建設と絨山羊改良は全国の最先端であるという<sup>(1)</sup>。

### ②アクス市の自然・産業と歴史

アクス市の地域は天山山脈から下ってきたアクス河とタイラン(台蘭)河の扇形沖積平原(海拔1,000m程度)で、アクス河の本流がアクス市街地の南部を流れて、タリム河に注いでいる。「アクス」とはウイグル語で「白水」「清らかな水」の意味であるので、まさにこの地域の発展はアクス河の賜である。アクス市は今日、工業も発展を見せているが、やはり農牧業が中心である。主に小麦・トウモロコシ・水稻・綿花・油料作物・甜菜・果物(瓜果)・野菜を生産し、牧畜業では主に羊・牛・豚の飼育を行っている。アクス市には、新疆生産建設兵団の農業第一師団(「農一師」という屯田兵部隊の本部が置かれている。

アクス市は、新疆の首府ウルムチ市からは989km、クチャ県城からは250km、カシュガルからは466kmの距離にある。人口は1988年当時34万人(うちウイグル族45%、漢族54%)、2002年現在約

(1)包学福主編『最美的還是我們新疆 阿克蘇地区』烏魯木齊・新疆人民出版社、1999年、1～2頁。

46万人である。アクス市は今日、南疆(新疆南部＝タリム盆地)の交通の中心で、南疆鉄道も通過し、空港も有している。少し前まではカンシュガルに行くにもホータンに行くにも、アクス空港は飛行機の給油地となっていた。

アクスは漢代には姑墨国の地であった。姑墨国は戸数3,500、人口2万4,500、兵4,500で、銅・鉄・雌黄[石黄、砒素と硫黄の混合した土]を産出したと伝えられている。王莽(後9～24年)の時代に恩宿王を殺して併呑するなど、勢力の大きい国家として覇を唱えていた時期もあった。唐代には姑墨州として安西都護府に隷属していた。

宋代にはカラハン朝が支配し、その後の元・明代にはモンゴルのチャガタイ王統の封地であった。清代半ばに新疆が本格的に北京の支配を受けるようになった1758年(乾隆23年)、まずウシュ(烏什)に辦事大臣が置かれた後、翌59年にはアクス(阿克蘇)とクチャ(庫車)にも辦事大臣が置かれた。のち1884年(光緒10年)新疆省が設立されると、恩宿直隸州の阿克蘇道(道台[行政長官])の所在地は現在の温宿県が設けられた(1902年、府に昇格)。民国期に入ってから、1913年(民国2年)に恩宿本府が阿克蘇県に改められ、県知事が置かれた。1933年にアクス行政区が第四行政区と改称されるとともに行政長官公署が置かれた。

今日、クチャ県およびその周辺には多数の仏教遺跡が残っているのに対して、アクスには見るべき観光名所がほとんどないことを中国のガイドブックも述べている<sup>(2)</sup>。これは、アクスが比較的早くイスラム教徒に支配されたので、仏教遺跡が徹底的な破壊を被ったからであろうと想像される。同市アインコ(阿音柯)郷のマイウラーナウム・モスク(買吾拉乃拇清真寺)はすでに600年余りの歴史を持っており、南疆イスラム教の活動拠点の一つである。わずかにアインコ郷とフンバシュ(渾巴什)郷のモンゴル城砦遺跡がアクスの歴史の証人となっているのみである<sup>(3)</sup>。

### ③クチャ県の自然と産業・地下資源

仏教文明都市としての庫車については後述し、ここでは今日のクチャの状況について説明する。クチャ県は天山山脈のほぼ中間の南麓、タリム盆地の北縁にある。県内を2つの主要河川であるクチャ河とウェイカン河(その上流がムザルト河)が流れ、農業経済の基礎が比較的充実しているオアシス農耕地域である。二つの河川には北方の天山山脈からの雪解け水が流れており、クチャの人びとは縦横に水路を切り開いて雪解け水を畑に引き込んでいる。クチャの地勢は北部は天山山区、中部は沖積扇状形礫石砂漠(モンゴル語で「ゴビ(戈壁)」)、南部はクチャ河とウェイカン(渭干)河の沖積平原からなっている。農牧業が盛んで、農業では主に小麦・トウモロコシ・水稻・綿花・油料作物・甜菜・果物(瓜果)・野菜を生産し、牧畜業では羊・牛・ロバ・馬の飼育を行っている。工業は石炭・電力・セメント・農業機械・絨毯製造・刺繍・食用油加工がある。

交通も非常に便利で、東はトルファン(吐魯番)に、西はアクス(阿克蘇)をへてカシュガル(喀什噶爾)などの諸城に、北は天山を越えれば東チャガタイ汗国の統治の中心であったアルマリク(阿力麻里)に到達する。今日は、烏(烏魯木齊)喀(喀什)公路＝国道314号線と独(独山子)庫(庫車)公

(2) 畢亜丁、張郁君、柳用能編『新疆旅遊叢書 走遍新疆』烏魯木齊・新疆美術攝影出版社、2000年、157頁。なお、新疆維吾爾自治區測繪局編制『新疆維吾爾自治區分縣地圖冊』(烏魯木齊・新疆美術攝影出版社、1998年、115頁)によれば、「人文景觀」として愛國詩人リムタリーフ(黎穆塔里甫)の墓穴(はかあな)とカラマクシン(喀拉瑪克沁)古城の2カ所、「自然景觀」として「塔河旭日」、「渾河古渡」、「古寺晨唱」の3つを挙げている(いずれも詳細は不詳)。

(3) 閻常年主編『中国市県辞典』北京・中共中央党校出版社、1991年、1292頁。

路＝国道217号線が庫車県で交差している。烏(烏魯木齊)喀(喀什)公路は21世紀になって旧道とは別に新設され、大型トラックが行き交っている。西はパキスタンまで伸び、カラコルム・ハイウェイと呼ばれる全長1,784kmの国際ハイウェイとなっている。人口は現在39万人(うちウイグル族が約9割)で、ウルムチからは739kmあるが、コルラ(庫爾勒)から273km、アクスから250kmであるので、クチャはコルラとアクスのほぼ中間にあるといえよう。

また、天山山脈を越えて、イーニン(伊寧)市までは921kmの道のりであるが、現在は新疆北部にまで走る幹線道路(国道217号線)が開通している。1984年クチャ県と隣接する輪台県との間で石油が見つかり、新疆エネルギー開発のきっかけとなった。それに伴いインフラ整備が進み、輪台県から民豊までタクラマカン砂漠を横断する砂漠公路が開設された。さらに、クチャは今日、南疆鉄道が開通しており、また空港(クチャ空港)も有している。亀茲(クチャ)はこのように、交通の要衝にあるという地理的な位置からも、西域文化の中で重要な地位を占め、悠久かつ燦爛たる仏教文明を形成してきた。

アクス地区は多種類の上質な地下資源でも有名である。石油・天然ガス・石炭がメインであり、タリム盆地の石油・天然ガス開発の主戦場であり、また南疆最大の石炭基地でもある。アクス地区の主な炭鉱地帯はクチャ県－拝城県－温宿県一帯で、東西に長さ400km、幅10～20kmに分布している。アクス地区の中では、実際にはクチャ県と拝城県に主要な炭鉱と鉄鉱山・銅鉱山・マンガン鉱山が集中している。クチャ県では、そのほか石英、砂岩、石灰石、明礬、塩化アンモニウム、石膏等も産出している。

具体的に見ていくと、クチャ県内にはアアイ(亜艾)炭坑区、フートンブラージ(胡同布拉吉)炭坑区が、拝城県内にはティエジク(鉄熱克)炭坑区、アルアケン(阿爾阿肯)炭坑区がある。鉄鉱山はクチャ県内にはシャングラ(山格拉)鉄鉱、ウカンブラーク(烏康布拉克)鉄鉱、シアフオタンシー(夏闊坦西)鉄鉱、アアイシアフオタン(阿艾夏闊坦)鉄鉱、イーリムザールド(依里木扎爾得)鉄鉱が、拝城県内にはラオフタイ(老虎台)鉄鉱がある。

銅鉱山は、クチャ県と拝城県に分布し、80カ所あまりの鉱山があるという。主要なものとしては、クチャ県にはチャックマック(恰克瑪克)銅鉱山が、拝城県にはカジェクトール(卡捷克托爾)銅鉱山、ディーシュイ(滴水)銅鉱山がある。マンガン鉱山は、クチャ県内にはイチックバシユ(依奇克巴什)鉱山、クルガン(庫爾干)鉱山、ロンチナン(竜池南)鉱山、ジョンムズリック(璟木孜力克)鉱山がある。そして、クチャと拝城の県境に、埋蔵量40万トンのカルグリ(カ爾古力)銅鉱山があり、拝城県には西はムザティ(木扎提)河から東はヘイイン(黑英)山にマンガン鉱山が見つかっており、すでに探索・調査されたカラングル(カ郎古爾)マンガン鉱山は品位18～25%、埋蔵量は82万トンという<sup>(4)</sup>。

クチャは古来より製鉄と石炭で名が聞こえていたところであったが、そうした鉱物資源の遺産は今日にも引き継がれているのである。亀茲国に3ヶ月滞在しその隅々を観察した玄奘は帰国後にまとめた『大唐西域記』に、「キビ、麦に適し、粳稻を産し、葡萄・ザクロを出し、梨・桃・杏が多い。気候は穏やかで風俗はすなおである。」「土地は金・銅・鉄・鉛・錫を産する。これらの国は善馬を多く産出する。」と記している。クチャはまさに玄奘法師が旅行していた時と同じ自然環境であり、そのままの生業が残されてきたところであるかもしれない。

(4) 包学福主編『最美的還是我們新疆 阿克蘇地区』烏魯木齊・新疆人民出版社、1999年、39～41頁。

## 2 「モグール16万人の集団改宗」物語

新疆の中心部を東西に走る天山山脈の北部では遊牧諸部族が遊牧生活を維持し、天山以南ではウイグル人たちがオアシス農業を中心に営んでいた。そうした生業形態の中、東チャガタイ・ハン国では、天山北部のモグール人(モンゴル人)が支配民族として君臨していた。そのモグール人がまず最初にイスラム教に集団改宗したと伝えられている。その「集団改宗」物語とその意味について考察してみよう。

初代のトゥグルク・ティムール自身のイスラム教信仰の事績はウイグルの歴史文献にも記載されているが、その物語は民間に広く流布しており、したがって神話的要素や迷信的色彩にあふれている。

言い伝えによると、トゥグルクは即位前ある時、アクスのアインコ(阿音科、現在の月牙泉)付近で狩りをしている際、ここで布教していたジャマルッディーン(賈拉里丁または哲馬魯丁)と遭遇、彼の教えを受け入れ、即位後に正式にイスラム教に帰依すると約束した。アクスはイスラムの出会いという特別な場所として取り上げられている。数年後、トゥグルク・ティムールはハンに即位したが、ジャマルッディーンはすでに死去していた。

その子エシュディン・ホージャ(額什丁和卓)は父の遺言に従ってアルマリクの宮廷に赴き、紆余曲折をへてついにトゥグルク・ハンと会うことができ、アクスでの約束の実行を申し出た。ハン是非常に歓迎し、エシュディン及び随員として同行していた大マウラー(毛拉mawla、イスラム教学者の尊称)のヒジマツ(黒的馬特)の主宰で入信儀式を挙げてもらい、ムスリム君主となった。イスラム名(経名)は「アイブボクリ・ムハンマド」(艾布伯克里・穆罕默德)と称した。

その後、トゥグルク・ハンはエシュディン・ホージャらと相談して、「イスラム教布教のためには、王公貴族一人一人と会見しなければならぬ。彼等がこの信仰を受け入れるならば問題ないが、もし拒否するようなことがあれば異教徒あるいは偶像崇拜者として殺す。」と決めた。

最初に会見したのは、カシュガルの名門家臣ドグラト部(朵豁剌惕部)の首領トレク(図列克)であった。かれはドグラト部アミールのボロジ(播魯只)の長兄で、ウルスの「別乞」(意味不明)でもあった。トレクはハンにイスラム教への帰依を問われた時、「3年前、私はカシュガルにおります時に、ある聖者に従ってイスラムに帰依しております。ただあなたを恐れておりましたので、アッラー(真主)信仰の祈りの言葉を大勢の前で唱えるということはいたしませんでした。」と答えた。そこで、トゥグルク・ハンとエシュディン・ホージャは彼のために入信儀式を行った。

それから、彼等は他の王公に対して一人ひとり尋ねたが、すべてイスラム教を受け入れる希望を表明した。ところが、アミール・ザラス(艾米爾札刺思、またはチュラス楚拉斯)の番に来た時、彼は入信を拒否した。この時、イスラム信仰を希望しない一部の人がハンの宮廷を包囲して、ハンが祖先の信仰を放棄したことを非難した。これに対して、ハンは武力の威嚇でもって信仰を迫ったため、入信を希望しない王公貴族も信仰を受け入れるしかなかった。そこで、当日、人びとの大きな歓声のなか、16万人のモンゴル人が長髪を切り落とし、集団でイスラム教への入信を宣誓した。これはイスラム暦754年(西暦1353/54年)のことであった<sup>(5)</sup>。「そこから、イスラム教はチャガタイ汗国のすべての地域で普及し始めた。」と、『中央アジアのモグール史：ラシッド

(5) 李進新著『新疆宗教演変史』烏魯木齊・新疆人民出版社、2003年、298～299頁。

の歴史』<sup>(6)</sup>の著者ミールザー・ムハンマド・ハイダル(米児咱・馬黒麻・海答兒)は述べている。

この「トゥグルク・ティムール・ハーンによる16万人のモンゴル人集団改宗」という事件は、それ以前の「サトゥク・ボグラ・ハーン(薩図克・布格拉汗)によるテュルク諸遊牧部族の集団改宗」の伝説と非常に似ている。

その共通点を挙げれば次の3点になるであろう<sup>(7)</sup>。

まず、この両事件は新疆におけるイスラム教の大規模な東伝運動のメルクマークと見ることができよう。政治権力者は統治上の必要から政権を固め異分子を排除するためには、領土内の宗教信仰を統一する必要があった。イスラム教は従順や忍耐を提唱し、また他宗教を排斥する特性を持っていたので、労働人民を使役するのに有利であるだけでなく、異分子を排除し、封建割拠勢力に打撃を与えて、中央集権体制を維持するのに有利でもあった。まして、イスラム教は支配下の民衆の中にすでに比較的広範な社会的基礎を築いていたので、政治支配者には受け入れやすかった。また、イスラム教にとっても、政治権力者との結合は自身の勢力拡大に有利であったことは言うまでもない。

第2に、とくにこの両ハーンがともにイスラム教神秘主義スーフィ派(スーフィズム)の直接的な影響を受けており、その秘密の布教のもとイスラム教に帰依していたことである。このように、スーフィ派の伝教者は新疆を含めた中央アジア一帯で活躍しており、支配階層の上層に影響を与えることによってイスラム教布教の目的を達成しようとした。

第3に、この両ハーンとも、入信後は自己の地位と権力を利用して部族民たちに集団入信を迫ったことである。こうした上から下への伝教方式は必然的に大きな強制力を伴っており、伝説で伝えられるような「奇跡」によって説伏したというだけでは必ずしもなかった。

### 3 モンゴル遊牧民(モグール人)の中のイスラム教

「モグール16万人の集団改宗」は、都アルマリクを中心とした、主に新疆北部に居住している遊牧諸部族が集団改宗したことを指している。彼等は、とくに遊牧民として草原生活に誇りを抱いており、引き続き遊牧を生業として、水草を追いながら移動し、束縛のない放浪生活を過ごすことに慣れてきた。したがって、トゥグルク・ティムール・ハーンのもと集団改宗したとはいえ、イスラムの信仰・宗教規則・律法(シャリーア)がモンゴル人たちを束縛することは出来なかった。相当長

(6)『伊斯蘭教小辞典』232頁「拉失德史」等の項。『中央ユーラシアを知る事典』327～328頁「<ターリーヒ・ラシーディー>」の項。『ターリーヒ・ラシーディー(ラシッドの歴史)』は、中国では『拉失德史(ラシッドの歴史)』『中亞蒙兀儿史—拉失德史(中央アジアのモグールの歴史—ラシッドの歴史)』『蒙兀儿斯坦史(モグーリスタン史)』『明代東察合台汗国史(明代東チャガタイハン国史)』と訳された。明の嘉靖年間(1541～45)にペルシア語で著された新疆の歴史書である。ミールザー・ハイダルはモグールの最有力家系であるドクラト家の一員で、母方によりインドのムガル帝国の建国者バブルの従兄弟である。内容は2編からなり、第1編[本史](1546年完成)は14世紀後期から16世紀半ばまで明代の新疆モグールの歴史の概説、すなわちトゥグルク・ティムールからラシッドの時期までのチャガタイ諸王の活動である。第2編[簡史](1543年までに書かれる)はウイグル人の社会・政治・軍事やイスラム教等の方面に関する史料、すなわちカシュガル・モグーリスタン・チベット・カシミールの地誌である。本書は14～16世紀の中央アジアの歴史、なかんずくモグール・ウルスの歴史に関する唯一無二の重要な歴史書であり、「元史」以後の漢文書籍の不足を補うものであった。かつて1895年にデニソン・ロスによる英訳が刊行されたが、その後もウイグル語・英語(新訳)・中国語・ロシア語に翻訳された。

(7)前掲書『新疆宗教演変史』300頁。

期間の間、イスラム信仰はモグール人たちの間に根付かなかつたとみて良いであろう。実際、彼等は中央アジアやペルシア等のイスラム国からはまだムスリムとして認められなかつた。モグール人がムスリムとしてイスラム世界から認められるようになるまでに、あと100年ほど要した。それは、ユーヌス・ハーン(羽奴思汗、在位1456-87年)の時代のことであつた。

ミールザー・ハイダルは当時のモグール人の状況について、「ユーヌス・ハーンが即位した当初、モグール人たちはすべて古俗に従い、モグーリスターンに居住していた。彼等は街や農村をきわめて嫌悪し、それらの地域をすべて避けていた。彼等はムスリムになつたとはいえ、有名無実に過ぎなかつた。実際、名義上でさえも話にならないほどであつた。というのは彼等は誘拐されて、他の異教徒と同じように奴隷と見なされ、周辺の各地に売られていたのである。」と述べていた<sup>(8)</sup>。

他方で、都市生活や農耕定住生活を非常に嫌悪していたモグール人は、定住の民を蔑視し、定住の民は納税の義務を負うだけで、遊牧民のために労役に服する下層階級にすぎないと見なしていた。したがって、モグール人は名義上はイスラム教を信仰していたが、定住しているムスリムを蔑視する態度は少しも変わらず、モグール人たちも同様に中央アジア各地から誘拐してきたムスリムたちを奴隷として酷使した。

モグール人の生活原則は依然として古老の伝統にならぬ、イスラムの拘束をほとんど受けることなく、イスラム教への改宗後もモンゴルの法律規範「ジャサク(ヤサ)」(札撒)が支配的地位を占めていた。モグール人たちは草原で生活していたため、礼拝寺(モスク)、イスラム神学校(経文学校)、宗教法廷など宗教生活を監督する機関は少なく、定住しているムスリムのように「五行」や「行大・小浄」、齋戒、その他のタブーを守っていなかつた。シャーマニズムの影響や氏族宗法観念は相変わらず部族民の中で重要な地位を占め、イスラム法(シャリーア)の規制を受けることはほとんどなかつた。

たとえば、イスラム法では「子供が血縁関係のない母を娶る」という婚姻関係を厳格に禁止していたが、モグール人たちの中では以前と同じように行われていた。イスラム法廷の法官にこの婚姻習慣を認可するよう強要するハーンも出現した。ドゥスト・マフムード・ハン(篤思忒・馬黒麻汗、在位1462-68年)は父エセン・ブハ(Ⅱ世、也先不花、在位1429-62年)のお妃のひとりをも娶るために、その婚姻に宗教法上の認可を与えることを拒否した法官7名を前後して殺害したため、のちにイスラム教徒たちから厳しい非難に遭っている。

新疆でのイスラム化を進展させたユーヌス・ハン自身は、農村や街に定住しなければモグール人は永遠に本当のムスリムにはなれないし、他のムスリム国家から奴隷と見なされて売買される運命から脱却できないと考えていた。それゆえに、彼は極力、モグール人たちが定住するよう努めたこともあつた。ユーヌスは16歳から46歳まで25年間のサマルカンド等での亡命生活を終えて、1456年モグーリスターンに戻る時、当初はアクスに宮廷を置くつもりであつた。当時のアクスは小さな町とはいえ、草原と比べてみれば都会であつた。しかし、彼は部下の離反を恐れて、この「都市定住」計画を断念した。が、のちタシュカン城(塔什干城)を奪取すると、再び都市生活に心酔し、長期間草原に戻らなかつた。そのために、一部のアミールたちの反乱を招き、彼は囚われの身となり、「今後は決して町や農業地域に居住する意志は持たない」と約束せざるを得なかつた<sup>(9)</sup>。

(8) 米児咱・馬黒麻・海答兒『中亞蒙兀兒史—拉失德史(第2編)』新疆人民出版社、1983年、11頁。前掲書『新疆宗教演變史』301頁より重引。

(9) 米児咱・馬黒麻・海答兒『中亞蒙兀兒史—拉失德史(第2編)』新疆人民出版社、1983年、295頁。前掲書『新疆宗教演變史』303～305頁より重引。

このように、新疆でのイスラム化の進展のためには、草原に生活する遊牧民の改宗よりも、定住生活を送る都市や農業地帯での布教・改宗・定着が鍵を握っていた。その鍵を握る場所が(1)クチャ、(2)トルファン、(3)ハミ、という都市を中心としたオアシス農耕地帯であった。

## 4 西域北道上の文化名城「亀茲」の歴史

### ①「古亀茲国」の民族

古代シルクロードの西域北道(天山南路)で栄えた歴史的な文化名城であるクチャの古称は中国の史書で「亀茲」と書かれた。ほかに「屈支」「屈茨」「邱茲」「丘慈」などとも書かれたが、すべてクチ Kuci の音訳である。北にそびえる天山の山中は各種の重要鉱物に富み、それらの採掘による鉱業の隆盛は亀茲国発展の重要な基礎となった。亀茲国は漢代には城郭諸国の中の大国で、鉄器の生産で名をなしていた。唐王朝は西域に安西四鎮を設けたが、亀茲にもその一つが置かれ、また短期間であるが、一時西域都護府の所在地ともなった。

その古代の住民はアーリア種に属し、一種の特別な言語を用いていた。それはインド・ヨーロッパ語系で、イタロ・ケルト語 Italo-celtic に近く、亀茲語(クチャ語)あるいは乙種トハラ語(トハラ語 B)と呼ばれている。彼等は前2世紀に中国・漢代の記録にあらわれて以来、白という姓を持つ王家をいただき、文化の上でも屈指の発展を見せていた。亀茲国は西域北道の覇権国として、西域南道の于闐国(ホータン)とともに重視されていた。

そもそも亀茲は「白」を意味し、その王家の姓は「白」、住民も「白い民」と呼ばれていた。その白人系の住民は中国の史書に現れるよりもはるか昔、4,000年ほど前からタクラマカンの地に生きてきた古い民族と考えられている。今日クチャのバザールでは白人系や漢人系など様々な顔が混じっているのが見られるが、深目鉤鼻・緑眼深髯じんもくこうびりよくがんしんぜんの胡人を偲ばせる顔立ちを見ることができるのはその名残りであろうか。

### ②亀茲国における手工業と「亀茲楽」

クチャはオアシス農業・遊牧業や鉱山業だけでなく、古来より手工業も発達していた。たとえば、クチャ絨毯は二千年の歴史を持っている。漢唐時代には「亀茲の利刀」は盛名を享受し、遠く中央アジアの国々にまで販売されていた。南北朝時代には「亀茲錦」は著名な商品となった。後涼の呂光はかつて亀茲の馬を「天驥龍麟」と讃えたことがあった。清朝期になると、クチャの子羊の皮は貢ぎ物になっていた。人びとはクチャを賛美して、「トルファンの葡萄、ハミの瓜、クチャの子羊の皮はすばらしい(一枝花)」と口にした。また、クチャ県はずっと「果物の郷」と称され、とくにクチャの杏、中でも小白杏は新疆中に知れわたり、加工後の干し杏は国内だけでなく、遠く香港・マカオ地区や東南アジア各国に輸出されている<sup>(10)</sup>。

芸術面でも、「亀茲楽」はかつて隋九部楽、唐十部楽の一つであった。それが朝鮮や中国を経て日本に伝わり、平安時代の宮廷音楽「雅楽」の源流の一つとなったとされる。クチャは亀茲音楽の伝統を色濃く残しているため、「歌舞の郷」とも呼ばれる。今日でも住民ウイグル人が歌と踊りに寄せる情熱に変わりはない。7月は麦秋の時、野良には麦刈り歌、脱穀歌が流れる。ウイグル独特の結婚

(10) 前掲書『中国市県辞典』1295頁左。



式にも、歌と踊りは欠かせない。踊りの曲はマシュラップと呼ばれ、古くから歌い踊り継がれてきた曲である。踊り手たちが一休みする間に、「盆の踊り」や「テーブルの舞い」などの曲芸が登場する。かつてペルシアからシルクロードを伝わり、様々な曲芸が渡来した。この踊りもその名残りなのであろう。

クチャの人びとにとって最大の娯楽はクチャ歌舞団の公演である。最も人気がある踊りが「美しきクチャの娘」である。また、クチャ歌舞団は最近「クチャ・セナム」など古代の仏教舞踊を再現する試みを行っている。千仏洞に描かれた舞楽天の踊りを参考に振り付け、古謡からヒントを得て曲を創作するという<sup>(11)</sup>。

### ③漢代の西域都護府

クチャは紀元前3世紀に「亀茲古国」として歴史に登場する。「亀茲国」は今日のクチャ県だけでなく南の沙雅・新和および東の輪台、西の拜城の各県をも含む城郭国家であった。天山南路で東西250km圏内で唯一の大オアシスだった。前60年、前漢(西漢)は烏壘城(現在の輪台東東大雅一帯)に西域都護府を設け、亀茲・姑墨・温宿等の城郭諸国を支配下に置いた。烏壘城は戸数110、人口1,200、兵300と伝えられているので、住民のほとんどは政府役人・軍人とその家族であったと思われる。

拜城県にはもともと二つの城、すなわち「パイ(拜)」と「サリム(賽里木)」があり、漢朝の時代には姑墨国と烏壘国に分属していた。唐代になって、西の城「パイ」はアシエン(阿悉言)城、東の城「サリム」はジビロ(俱毗羅)城とそれぞれ称するようになり、ともに姑墨州に属した。のち亀茲国に併合された。その後、遼・元・明の時代にはビシュバリク(別失八里)の地、すなわち東チャガタイ汗国の領土とされた。清の光緒4年(1878年)、両城に善後局が置かれた後、まもなく1882年7月、両城は合併し、拜城県が設置され、今日に至っている<sup>(12)</sup>。

クチャの西方につながる新和県はもと亀茲国の地で、唐代には安西都護府に属し、宋代は西遼の領土であり、元・明代はやはりビシュバリクの地であった。清の乾隆帝が新疆を征服した後、クチャ直隸州に属していたが、民国11年(1922年)にクチャ県より12荘を分けて「トクス県佐」を設け、1930年にトクス(托克蘇)県を設置した。1941年に新和県に名称を変更して今日に至っている<sup>(13)</sup>。今日は、天山南麓の幹線である国道314号線と南疆鉄道(ウルムチーカシュガル)がクチャ県を経て、新和県につながっている。

後漢(東漢)になって、漢朝は改めて西域都護・戊己校尉を亀茲它乾(タカン)城に置き、西域を治めさせた。亀茲它乾(タカン)城とは亀茲王城の東方、現在のクチャ県ヤハー[牙哈]郷タハンチ[塔汗其]城砦遺跡のことである。翌年、班超が再び西域都護府を復活させ、亀茲它乾城に駐留し、亀茲と姑墨を管轄した。

漢代に亀茲国の規模は戸数6,970、人口8万1,317、兵2万1,076であったと伝えられているが、それが本当ならば西域諸国の中で最大の国家といえよう。王は「延城」に治すというが、その場所是不確定である。街の外れに「亀茲故城」という名所があるが、城壁のごく一部が残っているに過ぎない。この国の国力の目安となるのは、鑄金・冶金の技術が高かったことで、鉄だけでなく鉛を産

(11)NHK取材班編『写真集 シルクロード絲綢之路 ②天山南路・天山北』日本放送出版協会、1981年、182頁。

(12)前掲書『中国市県辞典』1294頁左。

(13)前掲書『中国市県辞典』1296頁左。

したということを含めて、西域随一の国家とみることができる。その国力が、この土地の周辺に多数発見されている石窟寺院・千仏洞の建造にかかわり合った技術と富を支えていたわけで、それは並大抵のものではなかった。その多数の石窟の中でも、キジル千仏洞は敦煌莫高窟に次ぐ著名な石窟である。

#### ④西域五大強国の一つ

3世紀頃までは、亀茲国は車師(トルファン)、鄯善(楼蘭)、疎勒(カシュガル)、于闐(ホータン)と並ぶ五大強国と見なされうるほど発展していた。その頃の亀茲について、中国・晋(265～420年)の正史『晋書』中の「四夷伝亀茲国状」は、「三十の城郭があり、中には仏塔廟千所がある。人びとは田種畜牧を生業としている。男女はみな髪を切り、項に垂らしている。王宮は壮麗で眩いこと神居のようだ。」という記録を残している。少し後の中国南北朝・北朝(439～581年)の正史『北史』中の「西域伝」にも、「王は頭に縵の帯を付けて後ろに垂らし、金の獅子の椅子に座る。」などとある。4世紀後半の亀茲国の僧侶の数は、6世紀初めの玄奘訪問時の2倍、1万人もいたとされる。

魏呉蜀の三国鼎立時代に西域は十余りの国に分裂するなど、西域諸国の反乱や五胡十六国(西晋、前秦、後涼、西涼、北涼)等の進攻が繰り返された。265年、司馬炎が曹魏に代わって、西晋王朝を樹立すると、西域に再びその政令をとどろかせようとした。376年、長安を拠点とする前秦が前涼に代わって河西を統治するようになると、382年、前秦王・苻堅(在位357～385年。氏族出身)は武將の呂光に7万余りの遠征軍を指揮させて西域討伐に派遣した。同じ西域の車師(トルファン)や鄯善(楼蘭)による協力の申し出が遠征の直接のきっかけであった。車師や鄯善は西域での主導権争いのために中国の軍事力を引き込んだのである。呂光は15ヶ月をかけて亀茲国に至り、クチャ城を包囲した。亀茲国も疎勒に援軍を求め、北方騎馬民族の傭兵を雇って応戦したが、394年7月ついに落城した。逃げ遅れた白純国王は殺された。呂光は自分の子を鎮西將軍・西域大都督に任命して亀茲・姑墨を支配させた。

409年、西涼の王李嵩は晋より安西將軍・高昌侯の冊封を受け、姑墨を支配した。421年、北涼王・沮渠蒙遜が西涼を滅ぼすと、亀茲と西域各国はみな北涼に従った。南北朝の中期・晩期、亀茲は地方割拠勢力に悩まされながらも、中国内地の北魏・西魏・北周(以上は北朝)や蕭梁(南朝)の各王朝に朝貢使節を送り、一定の従属関係を保持していた。

#### ⑤唐代の安西都護府

609年、隋は射匱可汗を西突厥大汗に冊封し、他の可汗を攻撃させた。翌年、西突厥が一時この地域を統一した。隋朝は「西域校尉」を置き、西域諸国を統治させた。唐初は西域諸国は分裂状態であったが、647年(貞観22年)に唐の太宗が安西都護府を亀茲国都(イロル[伊邏廬]城)に移動させ、亀茲・于闐(現ホータン)・疎勒(現カシュガル)・碎葉(スイヤーブ)の4鎮を統治させた。これが史上にいう「安西四鎮」である。

しかし、670年、古代チベット王国「吐蕃」が西域18州を占領すると、于闐と亀茲撥換城(現在のアクス市)を攻め、同時に四鎮も陥落した。692年、唐は武夷軍総管を派遣して吐蕃を破り、亀茲・于闐・疎勒・碎葉の四鎮を回復、姑墨州・恩宿州・亀茲州が唐の支配下に戻った。このように、唐代には亀茲には安西都護府と亀茲都督府が置かれていた。人口は20万に達していた。壮大な仏教寺院の建立や20万の人口を養えるだけの豊かな国力は、豊富な農産物や鉱産物に加え、やはり天山南路が生む東西交易の利益が支えていた。

北宋の時期、アクスー帯は葛邏祿(カルルク)部の活動地域であったが、カラハン朝が成立した後はその支配下に入った。五代から宋・遼にかけて、亀茲可汗(クチャ・ハン)は地方政権の支配下にあったが、直接宋・遼と密接な往来を続け臣属関係を維持していた。

1286年、元朝がビシュバリク(別失八里)に元帥府を置いて、天山南路(駐留地は現在のウルムチ)を統治させた。1295年、元朝は北庭都元帥府を置いて北疆を管轄させた。1299年、元朝は曲先(現在のクチャ県)に都元帥府を設立して、天山以南の軍隊を統率させた。その後も、明代やカシュガル汗国の時代、そして清朝初期まで、この地はチャガタイ・ハン王家の後裔たちが内部分裂と地方割拠を抱えながらも引き続き統治していた。

1755年(乾隆20年)、清朝軍はここを支配していたジュンガル部の反乱を平定し、天山南北を統一した。1758年、清の乾隆帝は元代の苦先・曲先という名称を正式に庫車と命名した。同年、清朝軍はクチャ・アクス・ウシュ(烏什)の諸城を回復し、ウシュに辦事大臣を置いた。1759年、クチャとアクスにも辦事大臣を置いた。清光緒10年(1884年)、クチャ直隸庁となり、1902年クチャ直隸州に昇格、民国2年(1913年)になってクチャ県が設置された。

## 5 亀茲仏教文明の隆盛

亀茲に仏教が伝わったのは1世紀頃で、これ以後長い時間をかけて西域亀茲仏教文化が形成され発展した。亀茲仏教文化の隆盛を代表しているのは、造詣の深い一群の高僧大徳が相次いで出現したこと、および壮大な仏教寺院跡や石窟・千仏洞が今日まで残されていることである。

亀茲出身の高僧大徳といえ、<sup>はくえん はくげんしん ほうこ はくしりみつたら</sup>帛延、<sup>はくえん</sup>帛元信、<sup>ほうこ</sup>法炬、<sup>はくしりみつたら</sup>帛尸梨密多羅(シュリーミトラ)<sup>(14)</sup>、<sup>はくほう</sup>帛法原、<sup>げん だるまぼつだ</sup>達磨跋陀(法賢)、<sup>ぶつとちよう</sup>仏図澄(ブドチンガ、233? ~ 348年)<sup>(15)</sup>、<sup>くまらじゆう</sup>鳩摩羅什(クマラジーヴァ)といった高僧たちを挙げることができる。とくに中国の南北朝から唐朝に及ぶころの外国僧で、白または帛という姓を持つものはすべて亀茲の出身で、彼等が訳経その他で中国仏教の発達に資した功績は実に大きい。このなかで、帛延と帛尸梨密多羅は王族出身の僧で、一方は中原に、また一方は江南に赴いて活動している。

法炬は西晋末に、『楼炭経』『大方等如来蔵経』『法句喩経』『福田経』の4部を訳出した。また、308年の竺法護の『普曜経』の訳出の際に筆受人のひとりとして訳業に参加した人物である<sup>(16)</sup>。達磨跋陀とは、達磨多羅という人物のことであろう。達磨多羅は5世紀の初めころ西域で仏大先とともに禅法を鼓吹し、『達磨多羅禅経』という禅経を著した<sup>(17)</sup>。

4世紀初め、五胡十六国の時代に洛陽に赴いた名僧、仏図澄も帛姓だった。仏図澄は残忍な武將上がりの霸王たちを次々に帰依させ、無益な殺生や戦争をやめさせた。そのため民衆からも信頼されて多数の信者を得るとい、布教者としては最大の成功者となる。かれの宣教により建立された仏寺は893ヶ所、門下は1万近くといわれ、仏図澄の活動により中国仏教にはわかに隆盛となった。「中国仏教の父」釈道安、竺法雅は彼の高弟である。

(14)この伝法僧については、東大寺教学部編『新版 シルクロード往来人物辞典』昭和堂、2002年、13頁(登録番号1050)、を参照。

(15)この伝法僧については、前掲『新版 シルクロード往来人物辞典』13頁(登録番号1051)。仏図澄は2度ガンダーラに留学、310年洛陽に赴く。逝去したのは春秋117歳であったという。

(16)鎌田茂雄編『中国仏教史辞典』東京堂出版、1981年、344頁「法炬」の項。

(17)『中国仏教史辞典』243頁「達磨多羅禅経」の項。

## ①鳩摩羅什(クマラジーヴァ)

亀茲出身の高僧たちの中で、鳩摩羅什(クマラジーヴァ、350－409)が仏教經典の翻訳・整理の面で大きな貢献をなし、仏教界で非常に盛名をはせている。彼の訳業が初期中国仏教史上最大の貢献者としての地位を確立させたのである。

彼の父鳩摩羅炎は、インドの宰相の家に生まれたが、難を逃れて亀茲国にきて、その国王の妹と結婚。鳩摩羅什はその長男としてクチャで生まれた。王家は熱心な奉仏者で、その母は妊娠中も雀黎大寺で仏法を聞いていたと言われ、鳩摩羅什は生まれながらにして仏教の感化を受けた。母は仏教にことに熱心で、のちに7歳の鳩摩羅什とともに出家して、熱烈な尼となった。

当時、亀茲は説一切有部の本拠といわれたカシミール地方に直結しており、鳩摩羅什も母に従って25年間カシミール(罽賓国)に留学して、阿毘達磨大毘婆沙論を中心とする小乗学派を習い、ついでカシュガル(疎勒国)で須利耶蘇摩という大乘論師に師事し、中論や百論など大乘空義の学を修めたことが、後年彼を龍樹(ナーガールジュナ)系の中観教学の宣布者たらしめた。

説一切有部(有部とも略す)は、釈迦の滅後300年頃、上座部より分かれた小乗仏教の代表的部派である。「大毘婆沙論」「発智論」などが代表的經典であり、「俱舎論」(阿毘達磨俱舎論)はこの部派の主要な概説書である(「俱舎論」は法相宗の基本的經典ともなる)。この部派の教義は大乘の主要な論敵とみられたため、盛んに研究されたが、大乘仏教国でも戒律はこの部派の戒律によることが多い。

384年、五胡十国の前秦の王・苻堅の武将呂光が亀茲を征服した。呂光は多くの戦利品とともに捕虜にした鳩摩羅什を引き連れて、395年帰国した。途上、前秦国が滅びたため、涼州姑臧城(現甘肅省武威)に拠って後涼という新しい国を建てた。鳩摩羅什はここで18年を過ごしたが、この間に中国語や中国の事情に精通した。401年、53歳の時、五胡十六国のひとつである後秦王の姚興によって國師として都長安に迎えられた。待ち構えていた長安仏教界は数日後、彼が将来した仏典の翻訳を要請し、まず<座禪三昧經>3巻が訳出された(402～407年)。

國王姚興は国家事業として訳経を進めさせ、鳩摩羅什は西明閣および逍遙園において8年の間に35部294巻にのぼる大部の訳経を終えた。その訳業は、法華經(406年訳出)、阿彌陀經(402年訳出)、大品般若經27巻(404年訳出)、小品般若經10巻(408年訳出)、金剛般若波羅蜜經、その注釈書である大智度論、放光般若經、光讚般若經、維摩詰經(406年訳出)、中論(409年訳出)、十二門論(409年訳出)、百論(404年訳出)、十誦律など、のちの中国仏教にはかりしれない影響を与えた諸経論を訳出した。彼は仏典の漢訳により、格義仏教をただし、龍樹の空観を伝えた。また、廬山の慧遠との問答を記録した「大乘大義章」も当時の中国人の仏教受容の本質を知るものとして貴重な資料である。弟子は世に門弟3千人と称され、僧肇・僧叡・道生・道融(以上の4名は関内の四聖といわれた)・慧観らが輩出、三論宗や成実宗を形成した。

## ②スバシ故城

亀茲仏教文化の発展は、仏教高僧大徳の出現とともに、クチャの仏教遺跡として知られているキジルKizil(克孜爾)千仏洞やクムトラKumtura(庫木吐刺)千仏洞[庫木土拉石窟]の存在がこれを証明している。ほかにも、スバシ故城(蘇巴什古城)やクズルガハ(克孜爾朶哈)、センムサイム(森木賽姆)、マザバハ(瑪扎巴哈)の石窟寺がある。小乗派仏教の発展は当初著しく、それに伴ってすぐれた芸術が示された。

スバシ寺院跡は、クチャの街から北東23kmのところにあるチョル・タグ(確爾塔格)山の南麓、クチャ川上流(トンチャン銅廠河)の東西の両岸に広がる、西域最大の仏教遺跡である。このスバシ

寺院が『大唐西域記』にいう昭怛釐伽藍<sup>しょうごり</sup>である。創建は魏晋時期に始まる。南北2キロにわたって城壁に囲まれている。東寺区は約8万㎡、西寺地区は12万㎡と広大である。その広大な規模の故に、スバシ故城と比定されることもあるが、今日それは誤認であったという説もある<sup>(18)</sup>。

「仏像の荘厳さはほとんど人工を超えたり」と、この世のものとも思えぬ絢爛豪華な仏教寺院だと、7世紀初めクチャを訪れた玄奘三蔵は、その著『大唐西域記』に記している。夥しい数の仏塔・礼拝堂・千仏洞がひしめき合い、範囲は7,000平方メートルに及ぶ。

西寺の中心の仏塔はガンダーラ様式、東寺の中心の仏塔はインド様式である。クチャ河に臨む断崖には無数の洞窟が残っている。奥行き10mほどのトンネル状になっている。そして、その両側に高さ・奥行きとも1m、ちょうど人が一人座れるほどの穴が5個ずつ空いている。かつて僧侶たちが厳しい修行をした窟、禅窟である。石窟の壁には亀茲文字や仏教の人物図が残っている。この寺院跡からは、銅器・鉄器・木器・陶器・貨幣・粘土の仏像(塑像)等が出土したことがあり、また亀茲文字が書かれた木簡・残紙などの文物も発見され、古亀茲の歴史・文化の研究にとって非常に貴重な資料となっている。現在は自治区重点文物保護単位である。

### ③クズル・ガハ石窟群(千仏洞)

クチャの街から北西へ10km、天山山脈との間に衝立のように横たわる山並み「クエレ・タグ(却勒塔格)」山系を南北に割って走る河床「塩水溪谷(塩水溝)」がある。「チャール・タグ」はウイグル語で「不毛の山」という意味で、その名の通り、あまりの暑さと乾燥のためにひとかけらの緑も一木一草とてない赤茶けた岩肌をさらしている。クチャ旧市街の町並み自身も、泥煉瓦でできた家々が広がる、茶色の世界である。

その山並みの隙間を流れるこの塩水溪谷は、8月の増水期を除いてほとんど水が流れない。クエレ・タグ山から流れる大量の雪解け水には、高濃度の塩分が含まれているため、干上がった河底は真っ白く、結晶化した塩分で覆われている。その河床の真ん中を古い道が走っている。キジル千仏洞やクズル・ガハ千仏洞に行くには、この道を通らなければならない。

塩水溪谷から500mほど入ったところに、クズル・ガハの石窟群がある。今日、自治区重点文物保護単位である。南北に走る丘陵の東西の壁面に石窟の入り口が開いており、現在46の通し番号が記入されている。そのうち、比較的完全に残っているのが38窟。しかし、壁画が残っているのは11窟に過ぎない。最も古い窟は、3世紀から4世紀にかけて造営された。

石窟には、礼拝と読経のためのチャイティア窟(支提窟)と、僧侶の座禅・修行と生活の場であるビハーラ窟(毗訶窟)とがある。クズル・ガハ千仏洞には、高さ・奥行きとも4mほどの比較的大きなチャイティア窟が30窟あり、チャイティア窟が多いとされる<sup>(19)</sup>。チャイティア窟の中にある壁画は仏本生故事像が多いが、亀茲武將の供養人物像等もある。第9号窟と第15号窟の壁画は保存状態が比較的良好で、題材は仏本生故事画と座仏画像が主で、題材・画風ともキジル千仏洞とだいたい同じである。第11号窟と第30号窟に描かれている武將供養人物像、および第14号窟の八国騎士分舍利図は当時の亀茲武官の生活の様子を現している。第21号窟の「龍舟図」は当時の亀茲国の水上交通の状況を映し出している。

(18)前掲書『新疆旅游叢書 走遍新疆』164頁。

(19)前掲書『新疆旅游叢書 走遍新疆』163頁では、チャイティア窟19、ビハーラ窟19としている。

#### ④クムトラ千仏洞

クムトラ千仏洞はクチャの県城から西南30km、ウェイカン河(渭干河、上流がムザルト河)の東岸にあり、中国では丁谷山千仏洞と呼ばれる。ここは山肌がそびえ立ち、下は大河に臨み、地勢は峻険である。1961年、全国重要文物保護單位に1回目で認定された。現在はダムに面しているため、石窟内の壁画が大きな損傷を受けており、関連部門が保護の措置をとっているという。

單位番号が付されるものは112窟、うち72窟が現存。壁画と古龜茲文字が残るものは38窟である。石窟内の塑像はすべて破壊され、ただ第31窟の壁画のみは保存が比較的良好(盛唐時代の作品)。また新しく発掘された新一号洞・新二号洞は壁の保存が比較的良好、色彩も古(いにしえ)の趣きをとどめている。最も早い洞窟は3世紀に開鑿され、早期の壁画は南北朝時代に属す。唐代の壁画の主題は仏教や説法が主で、敦煌莫高窟と類似している<sup>(20)</sup>。この壁画には、漢文と龜茲文字の標題、あるいは古回骨文字の標題のものがある、また、壁画のなかの仏像はすべて龜茲古服を身につけており、一定程度古代龜茲人の文明水準を反映している。ここには阿奢理忒寺(アジャリニ寺)と推定される大伽藍跡があり、現在はトゥルドゥル・アクールと呼ばれている。

千仏洞には、5～7世紀のクチャ周辺に特有の画風である西方的な壁画の窟寺と、7～8世紀の東方的な唐風の壁画の窟寺が、それぞれ群れをなして存在している。中原の芸術と当地の芸術が巧妙に結びついて、独特の画風を形成している。それゆえに、高い芸術価値を有しており、他の地方の石窟と較べて自ずから異なるところがある<sup>(21)</sup>。

ここは、1903年に大谷探検隊が訪れて以来、06年のドイツのグリェンヴェーデル隊が、前後してフランスのペリオ探検隊が訪れ、世界に紹介した。大谷探検隊が将来した塑像菩薩頭、ドイツ探検隊の壁画などが、東西の様式をよく消化していて、クムトラの美術を代表するものである。そのほか、豊富な経巻や文書資料なども発見されている。

中国では、1960年代になって龜茲石窟研究所が発足、ようやく組織的な研究と記録、保存運動が開始された。1961年に全国重点文物保護單位に認定されたことが後押ししたのであろう。

#### ⑤キジル千仏洞

クチャ県城の西北73km、拝城県城から東に67km、ムザルト河(木扎爾特河)の北岸、ミンウィータグ(明屋塔格)山の絶壁に、キジル千仏洞がある。現在は、クチャ県の西北に位置する拝城県内にある。土地の人は、ムザルト河上流にあるキジルを「上の千仏洞」、下流のクムトラを「下の千仏洞」と呼んでいる。やはり1961年認定の第1期全国重点文物保護單位であり、中国四大石窟の一つとされている(他の3つの石窟、すなわち大同の雲崗石窟・洛陽の龍門石窟・敦煌の莫高窟が中国三大石窟とされる)。現在は、キジル石窟の入り口正面に、鳩摩羅什生誕1650年にあたる1994年に建立された鳩摩羅什の銅像がある。

3～4世紀に造営が始められ、10世紀まで五六百年間造営が継続された。造営開始は、中国中原で「三国志」の時代が始まり、龜茲国で仏教が隆盛を迎えた時期と一致する。中国に残されている石窟寺院の中では最も古い。5～7世紀が最盛期で、8世紀末より次第に停滞し、11世紀には放棄された。そして、14～15世紀にはイスラム教徒によって破壊されて、その歴史に終止符が打たれた。

(20)『中国地名詞典』上海辞書出版社、1990年、455頁。

(21)前掲書『新疆旅游叢書 走遍新疆』161頁。

高さ50～60mの断崖の中腹に、石窟が穿たれている。現在、236窟が数えられている(そのうち窟の形が完全なものは135窟)。その後詳細に数え直してみたところ、339窟あるという。巨大な大仏はすでに跡形もない。石窟寺院跡といっても、ただ数多くの横穴が穿たれた、東西2キロにわたって連なる断崖絶壁が見えるだけである。絶壁の中腹に一つだけ巨大な空間を掘り抜いたもの、小さな横穴が団地のように積み重ねられたもの、など様々である。最大の石窟は、床から天井までの高さが27メートルに及ぶ。石窟の建築様式は、インド風のドーム天井や、ガンダーラ風の三角持ち送り天井(大きな石を石室の角から対角線に平行に積み上げて造る天井)というように、国際色豊かであった。それ以上に、石窟の壁、天井、床に描かれた壁画の見事さが探検家たちを引きつけた。

## ⑥キジル壁画芸術

キジル千仏洞は、敦煌莫高窟に次いで、シルクロードに咲いた仏教美術の名花である。しかし、敦煌に比べると、ずっと西域的である。双頭の鷲<sup>ぐみようちゆう</sup>、共命鳥、菱形文様に囲まれた釈迦、翼をもつ飛天など、壁画にはペルシアやギリシアなどの影響が見られる。ドイツの学術探検隊が切り出したキジル石窟の壁画類は、イラン系を主とする高度の手法を伝えている。また、クムトラの壁画と同じで、大量に描かれている菱形文様は、その他の石窟にはあまり見られないもので、石窟芸術の名花と頌えられる<sup>(22)</sup>。

いまなお壁画が残っているのが80窟あり、壁画総面積は1万平方メートルに及ぶ。壁画の題材は小乗仏教の内容のものが多く、主に(1)仏伝、(2)因縁故事、(3)本生故事の3種類である。宗教的な内容以外に、農耕、狩猟、歌舞等の風習を描き、古亀茲の人びとの生活の様々な側面を映し出しているものも多い。そのほか、その石窟を寄進した者(歴代の国王・王族・貴族たち)の姿とともに、シルクロードの東西交易が盛んになった時代の新しい主人公である商人たちも多く描かれた。たとえば、第180窟では寄進した商人として、ペルシア系商業民族であるソグド風の大きな折り返しのついたコートを着てベルトで締めた腰に長剣を差し、さらに短剣を吊った人物が描かれている。

天井から床までくまなく壁画が描かれているのは、礼拝の場(チャイティア窟)として使われていた、全体の半数ほどの石窟だった。砂岩の表面に泥を塗り込め、その上に顔料を載せて描いている。キジル壁画の特徴は、第一に、濃い色と薄い色とを巧みに配置することで実現したリズムカルな構図。第二に、細やかな筆遣いと顔料の濃淡で描き出した、立体的でふくよかな人物像。ギリシア・ローマの流れを汲む写実的で自然なその描き方は、敦煌や雲崗など中国の仏教美術に大きな影響を与えた。

人物の手指が長く、直角近くに反り返った形に、顔はあくまでも丸く目鼻口を中央に寄せて描かれているのもキジル壁画の特徴だ。しかし、キジル壁画の最大の特徴は、別名「青の石窟」といわれるほどふんだんに使われている、青い顔料にある。緑や赤も使われているが、基調色は「群青<sup>ぐんじよう</sup>」ともいべき鮮やかな青である。キジル壁画では、青い海、青い川、青い空、青い月、青い猿、青い鹿など、石窟はまさに青の王国であった。内陸の沙漠の民には海や海を背景にした絵が多いのも、青い色を使いたかったからかもしれない。深い輝きを秘めたキジルの青。その原料はラピスラズリという宝石だった。深みのある群青色の中に点在する黄鉄鉱<sup>おうてつこう</sup>が金色に輝くラピスラズリ。それをすり潰して青の顔料とした。

(22)前掲書『新疆旅游叢書 走遍新疆』162頁。

古代、ラピスラズリはアフガニスタン北部、バダフシャン地方の深い山中でしか採れなかった。5,000年前にはエジプトに伝わって、ツタンカーメンの黄金マスクにもはめ込まれるなど、歴代ファラオに愛された。中国や日本では、「瑠璃るり」と呼ばれて、「玉」とともに珍重ぎよぶつされた。正倉院御物の一つ、平螺鈿背円鏡へいらでんはいのえんきよう(背面に螺鈿や象嵌を施した円鏡)には、ラピスラズリが象嵌されているが、それはアフガニスタン産であることが判明している<sup>(23)</sup>。

ラピスラズリは時間がたっても退色しない唯一の青の天然顔料で、世界のどの場所でも金銀と同等の高値で取引されていた。それほど、貴重な顔料をふんだんに使うことができた亀茲国の経済力や豊かさは、現代のアラブ産油国に匹敵させることができよう。

20世紀初頭、日本の大谷探検隊やドイツのグリュンヴェーデル隊やル・コック隊が訪れ、発掘調査している。とくにル・コック隊はこの石窟の壁画を大量に切り取り、ドイツに持ち帰るという略奪行為まで行なっている。その破壊の跡は、今も生々しく残っている。壁画の顔はことごとくつぶされ、壁画があったはずの壁がくりぬかれている。

### ⑦亀茲のウイグル化

白王家のもとに隆盛を誇った亀茲国は、6世紀末から西突厥の勢力に脅かされた。亀茲国の北方の天山山中のユルドゥズ Yuldus 河谷が、新興の西突厥の基地となったからである。続いて、西突厥の勢力をくじいて唐朝が進出すると、亀茲には、658年以來安西都護府が置かれた。安西都護府は、吐蕃(チベット)や突騎施(トウルギシュ)の攻勢を受けて、つねに動揺していたとはいえ、790年まで名目を維持して、唐の中央アジアにおける覇権の象徴となっていた。

ところが、9世紀中頃に、モンゴル高原に覇を唱えていたウイグル帝国が崩壊して、部衆の一部が東天山に移住し、さらに山南トルファン盆地の高昌(カラホージョ)に勢力を拡大すると、やがて亀茲はその高昌回鶻仏教王国の支配をうけ、以後はいわゆるウイグルスタンの重要な構成要素となった。すなわち、オアシス住民の言語が古代のアーリヤ系(亀茲語)から現在のトルコ系(ウイグル語)に変わったということである。これを「テュルク(トルコ)化」と称している。

カラハン朝(喀喇汗朝、9世紀半ば～13世紀初頭)以後、クチャはイスラム教と仏教の境界にあり、趨勢は明らかにイスラム教が次第に流入し仏教が衰退しつつあった。しかし、すでに豊かな経済力を背景に高度な仏教文化を形成していたクチャがイスラム教のさらなる東伝を阻んでいた。当時、クチャは高昌回鶻王国の版図であった。13世紀前は、カシュガルを中心とするカラハン朝と高昌や亀茲を中心とする回鶻王国は民族起源を同じくしほとんど同じ言語を話していたが、宗教信仰の違いから相対立していた。

### ⑧亀茲仏教の衰退

10世紀頃より亀茲の仏教は目に見えて衰え始めた。原因の一つは仏教寺院の数量や規模が度を超え、僧侶階層が膨大となりすぎたことである。玄奘の「伽藍百余ヶ所、僧徒五千人余」や慧超の「寺も充足し僧も多すぎるほどである」という記述は、こうした状況を反映しているのであろう。僧侶は生産から離脱しているだけでなく、仏事活動への支出も膨大で、亀茲地区のようなオアシス農耕

(23)NHK「新シルクロード」プロジェクト編著『新シルクロード3 天山南路／敦煌』NHK出版、2005年、「第5集 天山南路 ラピスラズリ 二 キジル「青の石窟」にて」(42～48頁)。



地帯にとって、寺院と僧侶への巨額出費を長期にわたって維持することは困難であり、その負担は相当過重であった。

また、亀茲がカラハン王朝の攻撃の最前線にあり、連年の宗教戦争の戦禍は当地の経済に大きな打撃をもたらしたことも、衰退の原因のひとつである。

漢文史籍では、亀茲は元代以後「庫車」「苦先」「苦叉」「曲先」などに改称されている。その地名の由来について、庫車(Kuqarak、Kucha)というのは「敬虔な仏教徒が都市に居住している」(Kuqkの意味は「敬虔な仏教徒」と説明しているものもある。これは当時カシュガルやヤルカンド、ホータン等のムスリムたちが仏教を信仰している亀茲の住民を指して用いた呼称で、代を重ねて伝わるうちに、この呼称が習慣となり次第に旧名に取って代わったとみられている。その名称の由来からも、カラハン朝から元代以後も長期間、依然として仏教がクチャ地区の主要な宗教であったことを理解することができる。このように、クチャ地域の住民はイスラム教が流入するずっと前から高度な仏教文化を形成していたのである。

## 6 クチャでのイスラム教伝道

クチャでのイスラム教伝道の民間伝説によれば、大体イスラム暦666年(西暦1267年)頃、シャイフ・ニザームッディーン・ダフワリー(謝赫・尼札木丁・達合瓦里)というインド出身のスーフィ伝道師がクチャに来てイスラム教を伝道したという。かれはクチャのシラフ(西拉合)地方に最初のハニカ(罕尼カ、タリーカ「道堂」)を建立し、一群の信徒を獲得した。彼の伝道はモンゴル帝国前期のことで、宗教の伝道は当局の保護を受け、比較的自由であったので、クチャのようなところでも根を下ろすことが出来た。当時、伝道の規模は大きくなく、信仰する人も少なく、また個別の地域に限られていたので、当地の仏教の地位には何の影響も与えなかった<sup>(24)</sup>。

クチャにおいてイスラム教が完全に仏教に取って代わるのはトゥグルク・ティムール・ハーンの時代で、エシュディン・ホージャがこれを実現した。エシュディンはトゥグルクをイスラムに帰依させた後、アルマリクに1年間居住した。その後、エシュディンはハーンにクチャへの伝道を願い出た。

彼のクチャ伝道の目的は二つあった。一つは、クチャ地区の位置・環境と当時の宗教情勢がイスラム教伝道に非常に有利で、エシュディン・ホージャはすでに東チャガタイ汗国の支配者の支持を得ていたから、成功する自信があった。もう一つは、エシュディン・ホージャは定住できる農業地帯に自分の一族を中心とする宗教組織と領地を持つという希望を持っていたことである。

アルマリクは遊牧民の活動の中心であって、こうした宗教組織や領地を作るのには適していなかった。というのは、遊牧民の中には礼拝寺(モスク)を建立する習慣や条件が欠けており、礼拝寺やそれに対応する寺院制度がなければ教民を管理し、牢固とした体制を形成することは出来なかったからである。また、経済的に頼りになる保障、つまり寺院経済の基盤となるワクフ(瓦合甫)資産を獲得することも出来なかったからである。かつての仏教文化を支えた豊かな経済力、安定した農耕生活、卓絶した手工業、豊富な鉱山資源を有するクチャは魅力的であった。

エシュディンの布教計画はトゥグルク・ハーンの支持を得た。ハーンは自ら命令を発して、国内の非ムスリム大衆はすべてイスラム教に改宗するよう命じた。また、ハーンはエシュディンが50

(24)前掲書『新疆宗教演変史』307頁。

人余りからなる伝道隊を組織してクチャに赴くことも支援した。そのメンバーはシャイフ(謝赫)、ムフティー(穆夫提)、カーディー(喀孜)、イマーム(伊瑪目)、ムアッズィン(穆阿津)、ハーフィズ(哈非孜)、ムルシド(穆力斯德)等の宗教資格を持つ人員からなっていた。

シャイフ(謝赫)は長老・年配者の意で、部族や村落、都市の街区、同業組合など世俗的な集団の顔役や指導者を指す一方、宗教的な文脈では徳高いウラマーやスーフィー・聖者への敬意の表現としても使われる<sup>(25)</sup>。尊称から一歩進んで、スーフィーの師、スーフィー教団全体の長、個々の修行場の長など役職名のように使われる。アラビア語を母語としない地域にも使用は広まっており、予言者の子孫、地域の名士層、政治的指導者を指すといった多彩な地域的用法が発達してきた。

ムフティー(穆夫提)はファトワー(法学裁定、イスラームの法規定に関する権威ある見解)を出す法学者のことであり<sup>(26)</sup>。ムフティーは一般信徒からの質問に答えて、口頭または書面でファトワーを提示することを公式の職務としている。裁判においてカーディー(裁判官)の顧問をつとめることもある。カーディー(喀孜)は、イスラームのカーディー裁判所(いわゆるシャリーア法廷)における裁判官を指し、統治者(理論上はイマーム)からの権限の委譲に基づいて裁判をはじめとするイスラーム法の適用を職務とする<sup>(27)</sup>。もっともカーディーの職務は司法の分野に限られず、モスクやワクフの管理など、行政の領域に属する分野も担当していた。

イマーム(伊瑪目)はイスラームの宗教指導者のことで、最も一般的なイマームは集団礼拝の時に最前列で礼拝の手本を示す人物(礼拝導師)を指す<sup>(28)</sup>。ムアッズィン(穆阿津)は礼拝の呼びかけ(アザーン)をする者をいう<sup>(29)</sup>。ハーフィズ(哈非孜)とはクルアーン暗唱者のことで、クルアーンの文句をすべて暗唱している者に与えられる尊称である<sup>(30)</sup>。

ムルシド(穆力斯德)はスーフィズム教団(タリーカ)において教導する導師をさし、導師に対する弟子の意味でムリードが使われる<sup>(31)</sup>。アラビア語のシャイフ、トルコ語のババと同様に、スーフィズムの導師を指して、ペルシア語文化圏におけるスーフィーの用語として「ムルシド」の呼称が使わ

(25)『岩波イスラーム辞典』446頁左「シャイフ」の項。今日でもこの語を年配者への呼びかけとしてごく普通に用いる地域もあり、また一芸に秀でた人物をさして「名人」の意味で用いるといった日常的用法も珍しくないが、全般には特定組織との関連でこの語を用いることが多い。

(26)『岩波イスラーム辞典』987頁右「ムフティー」の項。

(27)『岩波イスラーム辞典』273頁右。イマームはいつでもカーディーの任命を取り消すことができた。カーディーの資格要件のなかで特に重要なのは、法学を修得した自由人成人男子であるという点である。8世紀後半にアッバース朝の首都バグダードのカーディー職に大カーディー(カーディー・アルクダート)の名称が付された。大カーディー職は、司法組織の頂点に位置し、カーディーの任命をはじめとする司法行政を担当する職務となった。

(28)『岩波イスラーム辞典』168頁左「イマーム」の項。

(29)『岩波イスラーム辞典』958頁右。ムアッズィンに望ましいことは、声がよく通り、信頼が置き、礼拝時刻もよく知っている者になることである。女性がムアッズィンになることはない。モスクに一人でもよいが、預言者の慣行として2人いることが望ましいとされる。また、報酬が無給か有給か、あるいは国庫からの俸給かは学派により異なる。

(30)『岩波イスラーム辞典』776頁左。ハディース学派では、膨大な数の伝承を保持し伝承記憶の優れた者に対する呼称でもある。転じて、法源としてのハディースの権威を強調し、理性の介在の余地を認めないという否定的な意味で、伝承主義者に対して使用される場合がある。また、一般に守護者を意味することもあり、ティムール朝の歴史家ハーフィズィ・アブルーのように人名にもしばしば用いられる。

(31)『岩波イスラーム辞典』819頁左「ピール」の項、および990頁左「ムリード」の項。ペルシア語・トルコ語文化圏においてもシャイフが最も一般的であるが、インド・ムスリム地域(ウルドゥー語やヒンディー語文化圏)においては導師を意味する語としてむしろピール(原義は「年老いた」とか「老人」)が一般的である。

れた。スーフィズムにおいては師弟関係が重視され、ムリードは万事において導師に身をゆだねるべきものとされた。スーフィズムの大衆化に伴い、修道場に定住して修行に専心するスーフィーばかりでなく、権力者や他に生業を営む信者が高名なスーフィーのムリードとなることも多かった。

こうした様々な宗教資格を持つ人員から編成された伝道隊は「クチャ・イスラム教社団」と命名され、宣伝・司法・教育・寺産等の部門に分かれていた。彼等の大部分は中央アジア各地で募集された人びとであった。「クチャ・イスラム教社団」は特定の教派組織ではなく、あくまでもイスラム教の宣伝を目的とし政権の支持を得た国家機能的な布教団体であった。ハーンの許可を得て、この伝道隊は毎年、伝道経費として国庫から一定金額の特別支出金や牛・羊等を受け取った。

この伝道隊はクチャに入ると直ちに大規模な布教活動を行なった。彼等は礼拝寺を建立し、宗教法廷を設け、経文学校(イスラム学校)を始めた。エシュディンがクチャで始めた「ワリーヤ(瓦里耶)経文学院」はその規模の広大さと教職人員の質の高さから、当時は南疆一帯で非常に人気があったという。それとともに、住民の中で『コーラン(古蘭経)』『ブハーリー(布哈里)聖訓実録』(「真正集」、スナナ派六大ハディース集のなかで最も権威が高いとされる)<sup>(32)</sup>や『サイヤオック(仮訳、賽堯克、詳細は不明)』『ロスワンイーシーリーフ(仮訳、羅斯宛依西里甫、詳細は不明)』などスーフィ派の神秘主義を宣伝するパンフレットを配布した。

支配者の支持を得ていたので、伝道者たちの活動は少しもためらうところがなく、熱狂に近いものであった。彼等は「会う人ごとに清真言を唱えることを強要し、大通りから小さな路地に至るまで街中で人びとの熱狂的な布教活動が見られた」<sup>(33)</sup>。清真言とは、「アッラーは唯一なり」「清浄なり」「至清至真」「アッラー(真主)は本来ただ一つである。これを清真という」といった言葉で、アッラーを褒め称えることである。それまでは道観・仏寺やユダヤ教会堂、天主教など他の宗教も「清真」の語をいろいろな場面で使用していたが、明朝正徳年間(16世紀)以後、この言葉を避けるようになり、中国ではイスラム教のみが使うようになった。こうして、今日、イスラム教の用語として「清真教」(イスラム教)や「清真寺」(モスク)などの呼称が用いられている<sup>(34)</sup>。

イスラム教に改宗した人はニーヤ「意図」(七帖または尼葉)を得ることができ、当年の賦税を免除されたが、改宗を拒否した人は様々な不法な待遇を受け、拷問にかけられた。「ニーヤ」とは、信仰行為における意図やその表明のこととされる。イスラム教には「すべての行ないはニーヤによる。人はその意図したものを得る」という教えがあるが、それは意図が来世において問われることを指す。より具体的には、ムスリムは礼拝・犠牲祭り(グルバーン、宰牲)・喜捨(ザカート、施舍)・巡礼・ラマダン(封齋)のほか、売買行為・結婚・離婚などの儀式の前には、心ないし口でニーヤを表明する。中国ではさらに転用されて、各種の原因によりムスリムが喜捨や財物の寄付を決意することを「納七帖」「散七帖」と呼ぶようになったという<sup>(35)</sup>。したがって、ここでは教団が新しく信者となったムスリムに施し与えた財物や報酬等のことであろう。現世的な利益が改宗に利用されたのである。

(32)『伊斯蘭教小辞典』196頁「布哈里聖訓実録」の項。『岩波イスラーム辞典』515頁「真正集」の項、853頁左「ブハーリー」の項。

(33)玉素甫伯克『伊斯蘭教在新疆の伝播』(油印本)、新疆社会科学院宗教研究所蔵。李進新著『新疆宗教演變史』烏魯木齊・新疆人民出版社、2003年、308頁より重引。

(34)『伊斯蘭教小辞典』182頁「清真」の項。

(35)『伊斯蘭教小辞典』319頁「七帖」の項。『岩波イスラーム辞典』727頁左「ニーヤ」の項。

## 7 クチャでの亀茲仏教文化の破壊

「クチャ・イスラム教社団」の人びとはイスラム教を宣伝するとともに、各地の仏教寺院を破壊したり礼拝寺に改築したり、また仏像やその他の文物をたたき壊したり、仏教の經典古籍を焼き払ったりした。イスラム宗教法廷は無実の罪で仏教の僧侶に罪を言い渡し、少しでも反抗すれば殺戮された。改宗を願わない多くの僧侶はトルファン等に逃げるほかなかった。

この布教活動を通じて、「クチャ・イスラム教社団」の勢力は拡大した。「クチャ・イスラム教社団」は布教の範囲を広げて、一部の人員をアクス、シャヤル(沙雅)、カラシャール(焉耆)、トルファン等の地にも派遣して布教活動を行なった。

この間に、アルマリクで発生したイスラム教反対の運動がクチャにも波及してきた。クチャやシャヤル等で1万人余りの仏教徒たちが暴動を起し、支配者がイスラム教への改宗を強制することに反抗した。暴動を起こした仏教徒と「クチャ・イスラム教社団」は激烈な戦闘を行なった。しかし、暴動者側には指導者や統一した組織がなく、各自が勝手に戦い、装備も貧弱であったため、まもなくトゥグルク・ハーンが派遣した軍隊に鎮圧された。暴動に参加した仏教徒たちは外地に駆逐された。約4,000人がホータンを経てアフガニスタン北部国境地帯に移住し、東に追いやられた別ルート約6,000人は敦煌をへて甘肅省酒泉付近に定住した<sup>(36)</sup>。

こうして、クチャの仏教勢力は基本的に消滅させられ、当地の住民はすべてイスラム教を信仰するようになった。1,000年余りの歴史を持つ亀茲仏教文化は徹底的に壊滅させられた。現在、クチャはイスラムの街である。イスラムによる偶像破壊の波はすさまじく、現在のクチャの街の中には仏教寺院も仏像もない。ただ街から数十キロ離れた、交通不便な山中に造られた、いくつかの巨大寺院跡や石窟寺院跡だけが、その徹底的な破壊を免れることができたのみである。

考古学者によれば、クチャ地区の仏教寺院や石窟等は一般に元代以後次第に廃棄されたものであるが、同時に人為的な破壊の痕跡が明白であるという。たとえば、亀茲仏教文化の遺跡である拝城県内のキジル千仏洞は、専門家の見るところ、「開鑿の年代は東漢(後漢)末期とみるべきで、廃棄の時期はほぼ元代期であろう。完全な廃棄の時期については、イスラム教が南疆を統治していた時代であろう。」と推察している。天山以南の各石窟が全般的に衰亡した時期も大体元・明の交代期(約14世紀)である<sup>(37)</sup>。

考古学的な発掘により、一部の仏教遺跡から無数の古代文献が粉々に切り裂かれ、そこに殺戮された仏教僧侶の血だまりが染み込み、数百年を経て石のように硬い物質に凝結しており、傍らには首を切りとられ脚を折られた白骨が残されている状況が見られたという。多くの仏教文献の残巻にはしばしば燃やされた明白な痕跡があり、家屋や壁が倒れたために、これらの残巻は灰燼に帰すことはなく、幸運にも生き残ったのである。これらの事実は、イスラム教がクチャで布教していく過程で流血を伴う闘争があったことを示している。仏教の僧侶や信者だけでなく、仏教の建築・典籍・文物等も暴力的な破壊を免れることはできなかった。

(36) 前掲書『新疆宗教演變史』309頁。

(37) 閻文儒『西域見聞瑣記』「天山以南の石窟」、『新疆考古三十年』新疆人民出版社、1983年、569頁および581頁。前掲書『新疆宗教演變史』309頁より重引。

## おわりに

14世紀初めまでに、イスラム勢力は新疆の南西部を征服することには成功したが、その後約200年間アクスから先、東方のクチャには進出できなかった。クチャは天山山脈の雪解け水を利用したオアシス農業と豊富な地下資源を利用した鉱山開発や手工業、そして地の利を生かしたシルクロード交易の利益をもって繁栄していた。クチャは「亀茲国」として多くの仏教寺院・石窟・千仏洞とたくさんの僧侶を養っていた仏教王国であった。

1347年即位した東チャガタイ汗国初代のトゥグルク・ティムール・ハーンは、イスラム教を保護し、クチャへのイスラム伝道を支援した。遊牧民に対する改宗の結果として、モグール16万人が集団改宗したといわれる。が、それは表面的なもので、イスラムの信仰・宗教規則・律法(シャリーア)がモグール人たちを束縛することはできなかった。移動生活に慣れた彼らはイスラムへの改宗後も、都市や農村に定住しているムスリムを軽蔑し、遊牧民のために奉仕する下層階級と見なしていた。かれらの生活規則は依然としてモンゴルの法律規範「ジャサク」が支配的であった。そもそも草原にモスクやイスラム法廷を設置すること自体が困難であった。

そこで、エシュディン・ホージャは豊かなオアシス農耕地帯であるクチャへの伝道を企図し、伝道隊「クチャ・イスラム教社団」を組織して、大規模で熱烈な布教活動を行った。伝道隊にはシャイフ、ムフティー、カーディー、イマーム、ムアッズイン、ハーフィズ、ムルシド等の宗教資格を持つ中央アジア出身の聖職者が参加していた。彼等は仏教寺院や仏像等の文物を破壊したり、仏教経典を焼き払ったりした。イスラム宗教法廷は僧侶を抑圧し、反抗するものは殺戮したり追放したりした。その結果、クチャのイスラム化は実現した。が、長年シルクロード(西域北道)交易で栄えていたクチャ(亀茲)における仏教文化は徹底的に破壊された。現在、クチャの街の中には仏教寺院も仏像もない。ただ街から数十キロ離れた、交通不便な山中に造られた、いくつかの石窟寺院跡のみが残されているだけである。その代表的なものは、中国四大石窟の一つとされるキジル千仏洞やクムトラ千仏洞である。いずれも1964年、中国で最初に全国重要文物保護単位(国宝)に指定された。現在は亀茲石窟研究所が研究と保存を行っている。

イスラム化によって貴重な文化遺産が失われてしまったが、クチャ地区の仏教が衰亡しイスラム教がここで興起したことは、新疆宗教史上の大事件であった。それはクチャがイスラム教地区となったため、新疆最後の仏教中心地であるトルファン地区は防衛のための障壁を失ったからである。トルファンのイスラム化も時間の問題であった。